
GUNHUNTERGIRL

sola

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUNHUNTERGIRL

【Nコード】

N3141Z

【作者名】

Sola

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした少女チエリッシュがハンターになって原作イベントを極力回避しながら必死に生きる物語です。

主人公は少しトラブルメーカーですのでたまにいろんな騒動に巻き込まれます。

プロローグ

私は死んだ・・・

私は前世では何の特徴もない普通の女子高生だった。

ちなみに死因は車にはねられそうになった子供をかばっての事故死です。

確かにバトルマンガのようなファンタジーな冒険をしてみたいな！
とは思ったことはあるけど。

なんで

なんで

危険度満載なHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップしてんだろ・・・

まあとりあえず死ぬ気で修行して念を身につけますか。

あ、言い忘れましたけどこの世界での私の名前はチェリッシュ・バートンです。

若輩者ですがよろしくお願いします。

1話 水見式（前書き）

チエリッシュは原作のゴンやキルア並の天賦の才を持っています。

1話 水見式

ここはパドキアのはずれのとある田舎の港町

その街のはずれの森に4歳くらいの一人の少女がいた。

彼女の名はチェリツシュ＝バートン

4年前に神のいたずらかこのHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした者である。

「ふー、ようやく纏・練・絶と四五行がまともにできるようになったわ。

ここまでできるのに4年と長かったよ」

少女はここまでの苦勞をしみじみと独り言で語っていた。

まあ、赤ん坊の頃から両親に気づかれないうちにしながら瞑想をして精孔を開き、纏・練・絶・凝等と念の修行をしたのだから当然なのだが。(しかも、まだ体が幼いので念の上達に体がついていないためもある)

「さーて、水見式をやってみますかー。」

チェリツシュが両手を向け水と一枚の葉があるガラスのコップに向

かって発をすると

「どうということ・・・？」

水の中に不純物ができて水の色が変化してる・・・」

コップの水の水中には粒のようなものができて、水の色が赤くなっ
ていった。

「これって、私は得意系統は具現化系と放出系と2つもあるってこ
とかなー。」

ま、転生者補正ってところかしら

悪いことじゃないしそういうことにしておくと

というほうに1人納得した。

「あ、もうこんな時間だ。早く帰らないと父さんに怒られるわ。」

そして、彼女は目にもとまらないスピードで港街へと向かった。

2話 ガン・シヨ―（前書き）

たぐさんの感想待っています。

2話 ガン・シヨー

私の両親は芸人である。

なんでも昔、父ゲイル＝バートンと母ニナ＝バートンは警察だったらしく銃の腕はかなりのもので優秀だったらしい。

らしいというのは、なんでも警察がマフィアと手を組んだりして、詳しいことは知らないが、二人共世界の黒い部分を知って上司や上層部のやり方に付き合い切れなかったので辞めたそうだ。

今は射撃の特技を生かして凄いい早撃ちの曲芸撃ちを駆使したガン・シヨーをして生活している。

そして、今私は父から玩具の銃ではあるが、銃の扱い方を学んでいる。

「うーむ、チェリツシュは上達が早いなー。

さすが俺の娘だ。」

「父さんがやったことを真似ただけよ。」

(おいおい一朝一夕でここまでできるものじゃないだろ・・・)

父は百発百中での的に当てまくっている私を見て呆れていた。

そんな父が呆れていることを知らないチェリツシュは今後のことを

考えていた。

（ふう、今は原作が始まる10年前で私がハンター試験を受けられる年齢まであと6年

原作メンバー特にヒソカに遭遇したくないから早くとも原作の4年前の283期遅くとも2年前の285期にするべきだわ。この世界は死亡フラグ満載だから慎重に行動してある程度危険をなんとか自衛できるよう強くなるために頑張って修行しないと）

と必死にまじめに銃の特訓をしていた。

そして、夜

「ふー、ようやく練の持続時間は30分かー、
疲れた・・・

ゴン達はこんなきつついことしてたんだなー、凄いよ」

というふう遊び時間とかの暇さえあれば念の修行をして

それ以外は家の手伝いや銃の修行をする修行一色ハードな生活を送っていた。

3話 念銃 前編

銃の訓練を始めて1年たち、チエリツシユは5歳になっていた。

「ふー、当然といえば当然だけど、実弾が入った銃はまだ持たせてくれない。」

実はさつき父に実弾が入った銃を扱わせてほしいと頼んだのだが、父が

「少なくともまだお前には10年早い」と笑いながら言われた。

それで今、ゴム弾やBB弾の銃を使って訓練している。

(それでも子供には危険で持たせるのは早いと思うけど・・・)と考えながら、銃の訓練を始めようとしたら、黒色と銀色が混ざった色のものすごく気になる銃が目に入った。

「ねえ、父さん・・・この銃は？」

「ああ、それはずいぶん古いモデルガンさ。気に入ったのならお前にあげよう。」

その銃を凝で見ると

(いや、その銃はモデルガンなんかじゃないすごい銃だと思うけど、だって神字らしきものが刻んであるし、オーラがバンバン出てるから・・・)

訓練が終わり彼女はいつもの街のはずれの森に来ていた。当然、例の銃は持って来ている。

「さーで、早速試してみますか。」

と言って両手で銃を持ってみると

「すごい、自動的に周が発動してる。

しかも、自分の手足のような感じがする。

とりあえず、一発撃ってみよ。」

そう言いつつ、念の応用技の硬を込めながら銃を目の前の2m位の岩に向けて

ドンッ

と念弾を撃つと

バゴーン

岩が粉々になりました・・・

「・・・あまりこの銃は使わない方がいいかも
強力すぎるし・・・」

と彼女は半分呆然としていると

ガサガサッ！

「ん、なんだろ・・・」

そして、出てきたのは

「う、嘘、なんでキツネグマが・・・」

よだれを垂らした危険な肉食動物だった。

4話 念銃 後編

「グガアアアアアアアアアアアア」

キツネグマは即座に口を大きく開け涎を滴らせながら襲いかかってきた。

チエリツシユはなんとかそれをかわし体勢を整えたが

(ど、どうしよー、どうしよー)

というふうはまだパニックっていた。

そんな隙をキツネグマは当然ながら見逃すわけもなく追撃してきた。

そして、チエリツシユは

(キ、キャアアアアアア)

と大慌てしながら無意識に反射的に銃をキツネグマに向けて

ズッドオオオオオオオオオオオオ

とてつもなくでかい銃声と破壊音が周辺に響き渡った。

家に無事に帰宅した彼女だったが、

(つ、疲れた・・・)

うう、あのドでかい銃声は街にまで届いたもんだから騒ぎになって、警察や両親には報れないようにするのは大変だった・・・。

心身疲れ切っていた。

ちなみにキツネグマはチェリッシュが放ったあの念弾で跡形もなく消し飛んだらしい。

4話 念銃 後編（後書き）

念銃 波皇

神字が刻まれたオーラを込めることで念弾を撃つことができる念能力者専用の銃

念を知らない人にとってはただの使えない銃なためにいつのまにかモデルガン扱いになってしまったらしい。

能力

念能力者が持つと自動的に周が発動する。（使用者のオーラは消費しない）

使用者がピンチになればなるほど念弾の威力は増幅する。

5話 海賊襲撃

念銃を手に入れて、キツネグマのトラブルから3年たち私は8歳になっただ。

今日、両親は仕事で隣町に出かけており私は1人で留守番していた。

銃の訓練は両親のどちらかが一緒じゃないとできないので

(きつーく、自分達がいないうちにゴム弾やBB弾のものでも銃に
触れないように言われています。)

そのためこういう日は念の修行の方を中心にしています。

「よし、これで凝・隠・周・円・堅・硬・流とだいたいの応用技は
ある程度は習得だね」

念の修行は順調に進み、

円は今のところ20から30mまでできるようになり

最近、堅(練)も1時間以上維持できるようになって

結構、オーラの総量は上がっていた。

それなりに念の修行に慣れていつもどおりに過しているよ・・・

ウーウーとサイレンが町中に響き渡った。

「ん、なんだろ?」

とのんきにしていると

「か、海賊が攻めてきたぞー！」

「なんですとー!!！」

家の外に出ると町中大騒ぎだった。

「警察は何をしてるんだよ？」

「海賊の奇襲でこの街に在留していた警官全員殺されたよ」

「おいおい、襲撃してきた海賊は100人以上いるんだぜ。他の町から軍や警察の応援やハンターが派遣される頃にはこの町は壊滅だぞ」

（うわー、メチャクチャやばい状況だなー。

このままだと間違いなく甚大な被害がでる。

時間的に応援は期待できない。

仕方ない……

私1人で皆にばれないように海賊をつぶしますか……）

6話 チェリツシュVS海賊 前編

ガスッ

「グエッ」

ドコッ

「ハグッ」

ビュッ

「ギャッ」

「よしこれで10人」

チェリツシュは港に向かっていった。

とりあえずばれないようにフードで顔を隠しながら、

ここまで絶で気配を消しつつ

次々と海賊を倒していった。

さっきまで騒がしかった港町は住民全員が避難してがらんとしており
今、この町にいるのはチェリツシュと海賊と逃げ遅れて捕まった人
質のみである。

「まずは人質の救出から

確か皆海賊船につれて行かれていたわね。」

港 海賊船

「お願い助けて・・・」

「ひいひい」

「うわああああ」

「へへ大漁大漁だぜ」

「こいつら奴隷として高く売れそうですねー。」

「ああ、マフィアにでも高く売りつける予定だ。」

そこには60人ほどの海賊と牢に20人ほどの女・子供が捕らえられていた。

「そつえば船長はどこだ?」

「船長室で酒飲んでいます。」

「まあいい、軍や警察やハンター共が来る前にとつと引き上げようぜ」

長居は無用だ」

「あの一」

「どうした」

「町に向かった連中全員との連絡が取れません。」

「!?!? なにかあったな」

カリーン

「ん・・・」

海賊達は音がした方に目を向けると

そこには街に向かったはずの新入りが突っ立っていた。

「どうした新入り？」

「っ、っええ」

ドサッ

「「「!?!?!」」」

いきなり男は倒れてそこにはフードで顔を隠した小柄な奴が現れた。

7話 チェリツシュVS海賊 後編

「このチビが、どうやってここまで来たか知らねえが
ずいぶんふざけたことをしてくれたな。」

「ふん、てめえがいくら強かろうが武装した俺ら60人の敵じゃあ
ねーよ
死にやぶげらっあああああああああ
」

「て、てめえー、野郎共やっちまえー」

3分後

そこには海賊60人の死屍累々の山が出来上がっていた。
海賊達は銃を撃ちまくってチェリツシュを殺そうとしたが
あまりのスピードに翻弄されてその隙を突かれ彼女から
ゴム弾を喰らったり殴られたり蹴られてして全員あっという間に
何が起こったのかわからないままに意識を飛ばしたのだった。

「ふう、集団の対人戦闘の実践経験は初めてだから
少々不安だったけど楽勝だったわね。

父さんから護身術学んでおいて良かったわ。
さて人質の救出に向かいますか。」

ヒュウウウウ

「あれは!?!」

ドコオオオオン

「危ない危ない

まさかいきなりバズーカをぶっ放すなんて」

「てめえかぁー、俺様の部下を皆叩きのめしたのはあそこには全身に鎧を着た男がいた

」

「このクラーク海賊団船長であるクラーク様を怒らせたことを後悔させてやるぜ」

(え、クラーク……)

そしてよく見るとその男の姿はONE PIECEのドン・クリークに
ものすごく似ていた。

(プツ、なんかやられキャラにしか見えないわ)

「笑っんじゃねええええ (怒)」

「はいはい、とりあえず寝ていて下さいね。」
そう言っつてクラークを殴るが

ガキン

「へっ?」

「H A H A H A H A H A

ッ

「どうだー、ウーツ鋼でできたこの鎧の凄さは
てめえの攻撃は何ひとつもおおおつ効かねえな
さあ死にやがぶれあああああああ

「うるさいです(怒)」

「とりあえず周をかけたゴム弾を喰らわせて秒殺しました。」

こうしてたった1人の少女によって賊は全滅してこの日起きた海賊騒動は解決した。

7話 チェリッシュVS海賊 後編(後書き)

このクラークはまた登場させる予定です。

8話 天空闘技場 1

海賊襲撃事件から半年たち、町は平和な日々に戻っていた。

海賊達はガキにやられたとわめいていたが皆は賊の戯言だと思いい誰も信じなかった。

海賊を討伐したのは表向きは警察ということになっている。

私は海賊襲撃された頃は町のはずれの森で遊んでいたと両親にこまかしたからね。

ハンター試験を受けられる年齢まであと1年ちょっとになり私は両親に自分の将来を話していた。

「ハンターになるって、ハンターはどれだけ危険な職業かわかっているのか？」

「そうよ、私達は昔ハンター試験を受けたことがあるけど、とてもやばかったわよ。」

というふうに、メチャクチャ反対されていた。

しかも、今話した通り両親は10年以上前にハンター試験を受けたことがあるらしく、ナビゲータを見つけて本試験にまではたどり着いたのだが、2人共その本試験で大けがを負い落ちたらしい。

(まあ、そんなひどい目にあっただから当然か・・・)

それでも根気よく粘って説得を続けて、両親はようやく折れてくれた。

「はぁー、わかったわ、ただし条件があるわ。」

「条件って?」

「今から1人で天空闘技場に行つて、少なくとも100階クラスを楽勝でクリアできるようになればハンター試験を受けてもいい。」

(天空闘技場かー、修行と金稼ぎには丁度いいや。

まだ、それなりに時間があるしハンター試験に備えて頑張りますか。

)

9話 天空闘技場 2

「うう・・・むさいマッチョばかり・・・」

天空闘技場には巨漢・強面・筋肉と加えて

礼儀知らず・野蛮・下品な男達がずらりと並んでいた。

前も後ろもマッチョマッチョマッチョ。

しかも子供それも女がここにいることが非常に珍しいためか、

マッチョな男達は私に好奇心な視線を向けてくるのでかなり精神ダメージがきた。

数時間後

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要な事項をお書き下さい」

何時間も並んでようやく到着した受付で、

殺伐とした闘技場とは似合わない受付嬢に一枚の書類を渡され

名前・生年月日に適当に闘技場経験の有無・格闘技歴・格闘スタイルを書いて

書類を渡し、闘技場内に入った。

闘技場内は16のリングがあるかなり広いドームのような空間で、観客席からは主に野太い声での歓声が飛び交っていて

リングの上では鍛え上げられた筋肉の男たちが、

互角にあるいは一方的に戦りあっていた。

「1543番・2011番の方。Eのリングへどうぞ」

「あ、わたしだ。」

「両者リングへ」

（私に対する会場の野次は騒がしいな）

「おいおい、嬢ちゃん。ここは遊び場じゃないんだぜ？

ここにいてはことは大げがしても文句は言えないぜ。」

対戦相手である身長が私の2倍はありそうな巨漢の男は
そう言ったが私は無視した。

「ここ1階のリングでは入場者のレベルを判断します。制限時間3
分以内に自らの力を発揮してください。それでは、始め！！」

「さあ、嬢ちゃんくたばぶごおおおお」

右ストレートで観客席までブツ飛ばしておきました。

「……………2011番、キミは50階へどうぞ」

「どーも」

（さーて、頑張って修行と金稼ぎしますか。）

10話 天空闘技場3

天空闘技場にきて2週間たち私は対戦相手を全員瞬殺して

(ちなみにいつの間にか瞬撃のチェリツシュという異名がついたらしい)

どんだん上の階に上がっていき今私は200階にいた

「よし、200階に着いたしようやくこの銃が使えるわ。」

念銃“波皇”と具現化したガンベルトを装備しながら彼女は上機嫌で言った。

「今回の初の念能力者との戦いに備えて戦闘用の念能力を作ったし準備は万全、ドンと来い。」

チャージ・ガンズ(溜まりゆく弾丸)
能力

具現化したガンベルトに装着した銃に常にチェリツシュから削り取って吸収した一部のオーラを注ぎ込んでいく。(削られるオーラの吸収力がある程度調整できる)

たくさん注ぎ込めば込むほど撃つことができる念弾の威力や数が増える。

オーラを注ぎ込んだ銃を使用する際は銃に込められたオーラを使うのでチェリツシュ自身にはあまりオーラ消費はない。

ガンベルトを具現化して銃を装着してる間は常にオーラは削られて銃に注ぎ込まれていくので、チェリツシュのオーラに負荷をかけてオーラの総量を上げる効果もある。

普通の銃だとオーラを注ぎ込んで数カ月で限界になり壊れてしまいが、ガンベルトに装着している銃は神字が施されている念銃“波皇”で頑丈なので2・3年はもつ

3日後

「本日の対戦カードはなんとびっくり！ 天空闘技場では珍しい子供のそれも女闘士の登場です！ ここまでまったくの無傷で勝ち上がってまいりました9歳のチェリツシュ選手。この試合から銃を武器に戦うようです。はたして200階ではどんな戦いを見せてくれるのかー!!!？」

そして、対するはグラノ選手！ ここまで3戦して2勝1敗とまずまずの戦績を残しています」

対戦相手のグラノはさっきから私を見て笑っている。

なんかむかつくな（怒）

（よし、徹底的に叩きのめそう）

「始め！」

審判の掛け声と共に、グラノは背負っていた何かを取り出した。

「ふふふふ、君も僕のコレクションの餌食にしてあげるよ。」

そう言つてグラノが出したのは・・・

「女の子のフィギュア人形とマネキン人形・・・
・・・変態だ。」

「なんだと、僕のコレクションを馬鹿にするな！
キティちゃん軍団行つけー」

私に襲いかかってきた女の子のフィギュア人形とマネキン人形
正直言つて皆貞子やパームのような姿をした人形なので
いろんな意味で気持ち悪い・気味悪い・気色悪いの3拍子である。

「ぶっ壊す・・・」

ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン

バカン
バキャン
ボコン
ズカン

バコン
ベキヨ
バキッ
グチャ

「NOOOOOOOOOOOおおおおおおおおおお
キティちゃ ん！」

グラノは号泣して叫んだ。

「よ、よくもキティちゃんをー、
行っけー

スーパードキティちゃ ん」

等身大マネキン人形が突撃してきた

「ぶっ飛べ、バーストブレッド」

とんでもなくでかい念弾をマネキン人形に
喰らわせて同時にリングの4分の1程を無惨に破壊した。

「キティちゃ・・・ぐへ」

念弾の余波を喰らいオーラが尽きたグラノは気絶した。

「グラノ選手は気絶とみなし、勝者チェリッシュ選手」

(あ、ある意味で疲れたわ・・・)

10話 天空闘技場3 (後書き)

次話からついに原作キャラ登場
あの男がチエリツシュとバトル

11話 天空闘技場4

私が200階に来て半年がたちました。

現在、私は4勝0敗で負けなしなのですが・・・

ちょっと疲れ気味です。

なぜかというと

「なんで・・・

なんで・・・

私の対戦相手は皆、変態や変人ばっかなのー！」

そう彼女のこれまで200階で戦った選手4人は皆ある意味で普通ではなかった。

1戦目は女の子の人形遣いグラノ

2戦目は見た目はどこにでもいるクルトという青年だったのだが実は彼はオカマだった。

3戦目はビグルという男でオーラを熱に変える能力者で性格や能力は問題なかったのだが
彼はムキツムキな巨漢な男だったのでものすごく暑苦しかった。

4戦目はセクトというヤクザのような格好をした男でグロテスクな虫の大群を操って攻撃してきた。

とりあえず全員バーストブレッドの一撃でぶっ飛ばして半殺しにしました。

「まあ、ヒソカのような狂人よりはマシか・・・」

明日の試合やったら家に帰ろ・・・」

そう決心した。

次の日

「お待たせしましたー。4戦連勝中の瞬撃のチェリッシュ選手の入場です。」

(今回の対戦相手はまともな人でありませうに・・・)

「対するはここまで負け無し！期待の新人カイト選手だ　　！！」

（え、カイト？

どっかで聞いたことがある名前のような気が・・・）

そして現れたのは

「まさか10歳にも満たない子供しかも女の子と戦うことになるとはな・・・

悪いが勝たせてもらっぞ。」

初の原作キャラそれもカイトとの遭遇でビックリするチェリッシュだった。

12話 天空闘技場5

チエリツシユは呆然としていた。

(まさか、こんな所で初の原作キャラ遭遇するなんて・・・
まあ、この人は原作キャラの中ではかなりまともな方だから
いいけど)

「おい、大丈夫か？」

「あ、すみません。あなたからすごいオーラを
感じ取ったので・・・」

(さすがあのジンの弟子なだけのことはあるわ。
オーラの総量は私の数倍ありそう・・・)

「そうか・・・」

言うておくが俺は相手が子供でも手は抜かないからな。」

「はい、よろしくお願いします。」

「始め！」

両者が飛び出したのは同時であった。

そして、その動きは何れも常軌を逸するレベル。

もし、この場に第3者がいたとして、そのものが一般人であれば、否、相当に鍛えた武術家であっても常識の範囲にとどまるものであったのならば

2人の姿を捕らえることはできなかったであろう。

それができるのはこの2人と同じような非常識の域の達人のみで

2人の速さはそれ程のものであった。

「バーストブレッド」

私は念弾を放つ

「ふん」

カイトはそれをかわしたが

「喰らえ」

撃つた念弾の軌道进行操作してずらしてカイトに喰らわせた。

「クリティカル！！ 2ポイント！！チェリッシュュ！！2 - 0！！」

（よしこのまま攻めて攻めて攻めまくる。）

試合開始から20分後

ズドンッ

「キヤアアアア・・・」

彼女の身体は大きく弾き飛ばされ、地面に叩きつけられる

「クリティカル！！2ポイント！！カイト！！8 - 2！！」

「なかなかの実力・才能・素質があるよ。お前は
だがまだまだ実戦経験不足とオーラのコントロールは未熟だな。」

4番と書かれたピエロの銃を持ったカイトはそう言った。

「この、喰らえッ」

ドン

ドン

ドン

ドン

ドン

「そんな単純な攻撃が当たるとでも思っているのか？」

カイトはかわすが

「甘い！」

私はまた撃った念弾の軌道进行操作して少しずらしてカイトに全弾喰
らわせたのだが、

「同じ手が2度も通用すると思っているのか？」

カイトは念弾を全部撃ち落としてしまった。

「な!？」

「隙ありだ」

ズドンッ

「あぐ・・・」

彼女は場外まで吹っ飛ばされてしまった。

「クリティカル!!2ポイント!!カイト!!10-2!!」

こうして私は完敗したが、なかなかいい経験になったと思う。

12話 天空闘技場5（後書き）

これで天空闘技場編は終了です。
次話からハンター試験編になります。

13話 試験準備×出発(前書き)

ハンター試験編スタート

13話 試験準備×出発

天空闘技場の修行と金稼ぎは終わり、
ついでにカイトさんと仲良くなって
ホームコードの交換をしたりして、

3カ月たち私は10歳になった。

無事、私は両親からハンター試験の受験の許可をもらい
ハンター試験に備えていると準備のために

新しい2つの念能力を作った。

「よし、できた。」

これでハンター試験や仕事がいぶ楽になるわ。」

具現化された白い鞆とドアを見て彼女は上機嫌で言った。

ホワイティ・バッグ（四次元バッグ）
能力

ありとあらゆる物を出し入れは1日にそれぞれ10個までなら自由にできる。

（今、この鞆には両親からもらった
護身用の実弾入りの銃やストックの実弾・ゴム弾・BB弾数百発に
ライフル・麻醉銃やサバイバル道具や携帯食料等が入っている）

制約

価値が高いものほど出し入れする際に多くオーラを消費する。

フリーダム・ゲート（自由奔放な扉）

自分が行ったことがあるところへ瞬時に移動できる移動用の念能力。

制約

1度でも具現化したドアをセットした所でないといけないと移動でき
ない。

（今、この能力で行ける場所はパドキアのチェリッシュの
故郷の港町のはずれと実家のチェリッシュの部屋と天空闘技場だけ
ある。）

ドアのセットは1日1回1箇所しかできない。

この能力が使えるのは1日4回までである。

試験の登録も終わりハンター試験開始まで
あと10日の出発前日のある日に

私は両親からナビゲーターのことを教えてもらっていた。

「いい、2択クイズは沈黙してね。」

「ナビゲーターをやっている魔獣の凶狸狐達キシコに大けが負わせないよ
うにしろよ。」

この説明で分かったと思うが両親が教えてくれているナビゲーター
さんは

原作でゴン達を案内したキリコ達である。

（というか受験者のふるい落とし方は10年前や今や4年後も全く
変わっていないじゃん
少しはやり方を変えればいいのに）

そして、次の日

ハンター志望者が乗る船の甲板から

「じゃー父さん母さん行ってくるねー。」

絶対立派なハンターになるからねー。」

「おう、気を付けてなー」

「無理はしないでね」

私はただ無言で手を振った

その内、港町が見えなくなつてそこで他の乗客の声が聞こえた。

「くっくくくっ、立派なハンターか・・・嘗められたモンだな」

甲板に居るガラの悪い人達は笑いながら

「この船だけで十数人のハンター志望者がいる」

「毎年全国からその数十万倍の腕ききがテストに挑んで、選ばれるのはほんの一握り。狙う獲物によっては仲間同士の殺し合いも珍しくねエ職業だ。滅多な事口にするもんじゃねーぜ・・・お嬢ちゃん」

（なんか速攻でやられそうなくらい雑魚・小物的な人達ですね。あとどっかで聞いたことがありそうな会話のような気が・・・まあ、どうでもいいですけど

ん、あの人は原作で登場したゴン達の試験官だった船長さん）

「・・・荒れるな」

船長が呟く

（まあ確か嵐になりそうな天候ですね・・・今の内に船内に入っておきましようか）

14話 ドレ港到着×ドキドキ2択クイズ

嵐の夜が明けてチエリツシユは気分転換に看板に出ていた。

「ふー、昨夜はものすごい嵐だったわ。」

海を眺めていると船のスピーカーから船長の声が響いた

『これからさっきの倍近い嵐の中を航行する。命が惜しい奴は今すぐ救命ボートで近くの島まで引き返すこつた』

(受験者達は私以外全員ダウンだから多分・・・)

そして、彼女が予想していた通り

「結局、残った受験生は嬢ちゃんだけか。名を聞こつ」

「チエリツシユといます。」

「お前はなぜハンターになりたいんだ？」

「いろんな所に行って世界を自由に旅したいからです。」

あとトレジャーハンターやモンスターハンター志望ですと答えた。

「おいおい、そんな理由でか

ハンターはそんな甘い職業じゃねーぞ。」

「わかっていますよ。
それくらいの覚悟はできています。」

船長はしばらく私の目をじーと見つめると

「くつくくつ 迷いのない良い目だ。

気に入ったぜ嬢ちゃん合格だ

嬢ちゃんは俺が責任持って審査会場最寄りの港に
連れていって行ってやるぞ。」

「本当ですか？

ありがとうございます。」

数日後、無事にドレ港に到着して両親から聞いたのと同じように
一本杉を目指すのが試験会場への近道だと教えてもらった。

「船長さん、いろいろとありがとうございます。」

「おう試験頑張れよ。」

（両親が受けた10年前や4年後の原作と変わっていなくてよかったですよ

さーて一本杉目指して行きますか。）

数時間後

私はとあるお婆さんと向かい合っていた。

「ドキドキ・・・」

「・・・」

「ドキドキ・・・」

「・・・」

「ドキドキ2択クイーズ！」

（あー、原作知識でわかってはいてもなんか白けるわ・・・）

「お前さん、あの一本杉を目指してんだろ？」

あそこにはこの町を抜けないと絶対に行けないよ。

他からの山道は迷路みたいになっている上に凶暴な魔獣の縄張りだからね。

これから一問だけクイズを出題する。

考える時間は5秒だけ。もし間違えたら、即失格。
今年のハンター資格取得は諦めな

それでは問題。

お前の母親と妹が悪党に捕まり一人しか助けられない。
？母親　？妹　どちらを助ける？」

「・・・」

「5・4・3・2・1・0

ぶっ、終了」

「で、この問題の答えは沈黙ですよ？
だいたいこんなクイズに答えなんかあるわけありませんし
5秒で答えるって方も無茶ですからね。」

「ああ、その通りさ。
本当の道はこっちだよ。
一本道だ。2時間も歩けば頂上に付くよ。
頑張って立派なハンターになりなよ。」

「ありがとうございます。
では私はこれで」

（はー、知ってはいたけど・・・キツイクイズだったなあ。）

15話 ナビゲーター×試験会場到着

今私はナビゲーターのキリコー家が住む家の前にいる。

「さてと行きますか。」

そう言っただけで家に入ると

「キルキルキルキール」

扉を開けた先にあつたのは床に血を流して倒れている男性。そして魔獣とその魔獣に捕まっている女性がいた。

「キルキルキール」

魔獣は女性を抱えたまま私に襲いかかってきたが

「ていつ」

ゴスッ

速攻で叩きのめした。

「いやー、まさかこんなにあっさりやられるとはねー。」

「とてもルーキーとは信じられないよ。」

無事にキリコ一家に試験会場案内の承諾をもらってなぜか船長さん同様に気に入られて一緒にお茶を飲んで寛いでいた。

「合格だ。君を試験会場まで案内しよう。」

「ありがとうございます。」

数日後、私は今年の試験会場に指定されている街のパラスタに来ていた。

ナビゲーターのキリコ（夫）の案内で町のはずれの客がないバに入った。

「ちょっと待っててくれ」

店に入ったキリコは私にそう言って店員に何かを耳打ちした。

そして、店員に店の奥にある隠し部屋に案内された。

「1万人に一人。ここに辿り着くまでの倍率さ。」

君は新人にしちゃ出来だ。

それじゃ頑張りなよ、ルーキーのお嬢ちゃん。

君なら来年も案内してやるぜ」

そう言ってキリコは店から出て行った。

「よっし、ハンター試験頑張るぞ」

私は気合を入れて試験会場に入った。

16話 ハンター試験開始×一次試験

験会場にはすでに軽く100人以上の受験者がいた。

その人達をじーと見ていると私と同じくらいの身長で

頭が豆のようにツルツルした

試験の関係者らしき人^{ビンス}が話しかけてきた。

「ハンター試験受験者の方ですね。お名前を教えてくださいませんか？」

「チェリツシュ＝バートンです」

「はい、ではこのプレートを胸に着けておいてくださいね。」

そう言って私に435番のプレートを渡して去っていった。

「とりあえず試験が始まるまで壁の方で大人しくしてようかな」

そして移動しようとしたら

「なあ、君は初受験者だろ？」

小太りで四角い鼻の人が話しかけてきた。

「ええ、そうです。あなたは？」

「ああ、俺はトンパってんだ。よろしくな。」

俺はハンター試験のベテランだから

色々教えてやろうと思っただけ。」

「へー、何を教えてくれるのですか？」

「んー、気を付けなければならぬ受験生とかだな。そつだ、近づきのしるしということで乾杯しないか？」

「いやいいです。おなかを壊したくないので新人漬しのトンパさん」

そう言うとトンパは額に汗を浮かべて去っていった。

（まったく少しは手口を変えればいいのに馬鹿ですね今年のハンター試験は私以外念能力者はいないみたいですしいけますね）

そんなことを考えながら時間をつぶしているといきなりベルが大きく鳴り響いて道着を着た巨漢の男が現れた。

「時間となりました。それでは第283期ハンター試験を開始します。それではみなさんご存知かとは思いますが、最後にもう一度確認致します。このハンター試験では試験中に大怪我を負ったり五体満足ではなくなる、また最悪の場合は死亡する事もあります。それでも受験される覚悟の有る方以外はここから退出してください。」

試験が始まってしまつと、もう後戻りはできません」

誰も退出しないのを確認して

「よし、534名全員参加つと俺は一次試験官担当のゴズマだ。一次試験はいたって簡単」

そう言うと天井にロープがいたるところに出てきた。

「落ちないようにすることだ。それではスタート」

いきなり床が崩れ私はジャンプしてロープをつかんで上にのぼりロープを掴めなかった半分以上の受験者が底に落ちていった

一次試験通過者 196名

17話 二次試験×三次試験

一次試験をクリアした私達は一次試験会場と似た二次試験会場であるただ広いだけで何も無い部屋に来ていた。

一次試験通過者全員がそろつと

マフィアのような格好をして顔中に傷がある老人が現れた。

「続けて二次試験を始めるぞ。

わしは二次試験官のヴォルケンじゃ

二次試験はわしの殺気に耐えられたら合格じゃ」

瞬間、世界の音が消えた。

ヴォルケンから発された殺気が一時的に世界を殺したのだ。

「あ……………ああ……………」

「ひ……………」

周囲からつめき声や怯えた声が聞こえてくる。

耐えられなかった受験生は気絶したり

腰が抜けたり、体が震え、歯の音が合わず、失禁してしまったりしていた。

「ま、こんなところかの。
動ける者についてはきなさい。
三次試験官の所に案内するわい。」

周りの受験者達はさっきの殺気のせいか
息が切れているのが大半だったので
皆ふらふらしながら歩き出した。

私はどうなのかって？

当然、なんともありませんでしたよ。

二次試験通過者 86名

30分後

私達受験生は町のはずれの岩山に来ていた。

「到着、おついていた
では後は頼んだぞ。」

そして、現れた3次試験官は

「あたしは三次試験官のビスケツトだわさ」

(うわー、カイトさんの時のようにすごい偶然ね
まさかこの人に会えるとは思わなかったわ。
偶然って恐ろしいかも)

「三次試験はあんた達に渡したこのリストに書かれた宝石の採掘だ
わさ

制限時間は1週間それまでにリストに載っている宝石を一種類でい
いから
持つてくることそれでは始めるわさ」

「この石はわずかではあるけど
オーラを発しているのがあるわね。
うーん、とりあえず円と凝でそれっぽいのを探してみるかな・・・」

そして、円と凝で探し続けて1時間後

「キヤーツ」

「ん、何だろ」

そして、かけつけると

茶髪できれいな十代後半の女性の受験生が熊に襲われていた

「危ない!」

ドンッ

一発で眉間に撃ちこみ熊を撃破しました。

「大丈夫ですか？」

「ええ、おかげで助かったわ。私はレイラ
あなたは？」

「チェリツシユです」

「チェリツシユちゃんね。

この借りはすぐに返したいけど
今は手持ちは何もないのよ。」

「出世払いでいいですよ
では私はこれで」

「ありがとう」

お互い頑張りましょうね」

レイラさんと別れて1時間後

「よし、見つけた。」

そして、そこを掘り出すと虹のような色をした宝石が出てきた。

「よっし、指定されているレインボージュエルをゲット

あとは・・・そこにいる人

隠れていないで出てきてください。」

草むらから棍棒を背負いサングラスをかけたリーゼント頭のガラの悪い男が出てきた。

「ほう、よくわかったな。

その宝石をよこしな

おとなしく渡せば命は助けてやるぜ。

ガハハハハ―」

「お断りします」

「そうか・・・

なら死ねええええ」

リーゼント男は棍棒を手に持って襲いかかってきた。

私はとつさに銃を抜いてリーゼント男の棍棒を破壊した。

「まだやりますか？」

「く、くそ

これでも喰らいな」

男は私にスタングレネードを投げつけた。

バシユウウウウン

周りは音と光に包まれた。

「へへ、隙ありだぜ。
死にな。嬢ちゃん」

リーゼント男はそう言ってナイフを手に
チェリツシュを殺そうとしたが

ドン
ドン
ドン
ドン

両手両足に銃弾を喰らって倒れた。

「な、なんで・・・」

「残念でしたね。」

私は気配を探るのは得意なんですよ。

あとあなたに喰らわせた弾は強力な麻酔弾です。

1週間後の試験終了まで寝ていて下さい。」

「ち、ちくしよおお・・・」

（ふー、円が使えなかったらヤバかったかも
次からは気をつけよう。）

さて今の音で他の受験生が来る前にこの場から離れますか。（

私はリーゼント男の意識がないことを
確認してすぐに試験官の所に向かった。

「よし、指定された宝石ね。
435番合格第1号だわさ。

とりあえず三次試験終了まで
あの飛行船で待機してなさい。」

「ふう、やっと一息つけるわね
一週間ゆっくり休みますか。」

そう呟きながらチエリッシュは飛行船の中に入って行った。

3次試験通過者 36名

試験官達のお食事会（前書き）

今回はおまけ話です

試験官達のお食事会

「今年は何人合格するかねー。」

四次試験会場に向かっている飛行船の試験官の部屋で

ビスケット・ヴォルケン・ゴズマの3人の試験官が食事をしていた。

「さあねー、今年の受験生のレベルは並で普通だからの
多くて10人くらいじゃないかのー」

ゴズマの言い出したことにヴォルケンはのんびりと答える。

「少なくともあの女の子は確実に合格すると思うわ。」

「あの女の子って・・・」

「今回の受験者唯一の念能力者である435番のことですか」

「ええ、念能力者としての強さは中堅ハンター級に匹敵するくらい
ありそうだし」

「そっぴいえはあの娘が持っていた銃にはかなりの量のオーラが込め
られていましたね」

「むっ、確かにすごいオーラだったのう」

「あれは多分あの娘は具現化した

ガンベルトの能力で常に自分のオーラを削って銃に
オーラをため込んでいるんでしょうね

まったくまだ10歳なもんだから驚いたわさ
ふふ・・・、気に入ったわさ
試験が終わったら弟子にして鍛え上げてみようかしら」

同時刻

私は一緒に二次試験を合格したレイラさんと食事していると

クツシュン

「どうしたのチエリツシュちゃん？」

「うーん、風邪かなー。」

「万全の状態で試験にいとむために
体調管理に気をつけてね」

最強級のプロハンターに目を付けられたことに
チエリツシュは知る由もなかった。

18話 四次試験×五次試験

私達受験生は四次試験会場である館の前にいた。

そんな私達の前にサングラスをかけたおじさんが現れた。

「俺は四次試験官のモラウだ。」

（また、原作キャラ登場ですか
マジで凄い偶然ですね・・・）

「四次試験は受験生同士のタイムンだ。」

「タイムン？」

受験生の1人が疑問を浮かべて言った。

「ああ、この箱の中にお前らのプレートナンバーが書いたカードが入っている

俺は今から2枚ずつひいていく。

そして、引いた2枚のカードのナンバーの受験生同士

試合をして勝った方が四次試験通過だ。

じゃさっそく始めるぞ

まずは211番と124番・・・」

1時間後

「次、435番と18番」

(あれ確か18番って・・・)

そして現れた18番の受験生は・・・

「はあ、私の相手はあなたですか
新人潰しのトンパさん・・・」

「へへ、俺の相手はルーキーのお前さんとは
ついてるぜ。くくく

お前はここでつぶれてもらっぜ。」

「始め」

「はははははー、

世の中の厳しさってやつを教えてやるぜ」

そう言っつてトンパはチェリツシュに突進したが、
彼女の姿が視界から消えてしまった。

「な、いったいどこに・・・グアッ」

チェリツシュは瞬時にトンパの後ろに回り込んで
首に軽く手刀を喰らわせてトンパを気絶させた。

「435番四次試験合格」

その後、レイラさんも無事に合格して
四次試験も2人そろって通過した。

四次試験通過者 18名

「ここにいる30名が4次試験通過者だ。

お前ら30名は来年ハンター試験を受ける際には、無条件で試験会場まで案内される。

では五次試験を開始する。全員館の中に入りな。」

なんとなく次の試験の内容を予想したチェリツシユはこっそり隠ではれないようにフリーダム・ゲートをセットしておいた。

受験生全員が館に入ると入口がいきなり閉まって出られなくなってしまう。

そして、モラウの声がスピーカから聞こえた。

「五次試験はいたって単純でその館から72時間以内に脱出することだ。

いたるところに罠が仕掛けてあるから気をつけろよ。では始め」

「ではレイラさん私はこっちのルートで行きますね」

「ええ、チェリツシユちゃんも気を付けてね」

私はレイラさんと別れて周りに受験生がないことを確認して

「やっぱり試験内容は
なんとなくではあったけど
勘は当たったようね。さてと・・・」

移動用の念能力フリーダム・ゲートを使用した。

「これでクリアっと
楽勝だったわね。」

そう言ってドアをくぐると

「うおっ!?!、びっくりしたぜ。まさかお前さん
珍しい移動用の念を持っていたとはな。」

目の前にモラウがいた。

「これで私は五次試験合格ですよね?」

「ああ、五次試験が終わるまで飛行船の中で待っていてくれ
あとは最終試験だけだ。がんばれよ。」

「ええ、わかりました。あ、一応言っておきますが
私の能力のことは・・・」

「ああ、わかっているもちろん他言しないぜ。」

モラウは笑いながらそう言って去って行った。

(ふー、ハンター試験クリアまであと一歩
最後まで気を抜かずにがんばりますか。)

そして、次の日にレイラさんもクリアして
無事に2人そろって最終試験である。

五次試験通過者 6名

19話 最終試験(前書き)

あの男が再び登場

19話 最終試験

「いよいよ、最終試験ね」

「ええ、そうですね。」

ここまで来たんですから

2人そろって合格しましょうねレイラさん」

「ええ、そうね。チエリツシュちゃん」

今私達6人の受験生と4人の試験官は
ハンター協会が貸し切っている施設にいた。

「さて、今年のハンター試験は次で最後だ。
そして最終試験はネテロ会長自らによって行われる。
では会長どうぞ・・・」

そして、高い下駄を履き
モヒカンに似た髪形の老人が笑顔で現れた。

「ふむ、さすがここまで残っただけあってなかなかの強者ばかりじ
やの

紹介された通りワシがハンター協会会長のネテロじゃ。
最終試験はわしらが用意した敵を倒すことじゃ
ちなみに用意した敵とは
死刑囚や危険指定されている魔獣・猛獣じゃから
死なないうつ気を付けるように

ではさっそく始めるとするかの。」

そして、1人1人試験されていき

レイラさんはグレイトスタンプ5匹に苦戦ながらも
なんとか勝利して合格して

他の4人の受験者は

2人落ちて2人合格して

最後になっていた私の順番がきた。

「頑張つてね。チエリツシュちゃん」

「大丈夫ですよ。レイラさん。

絶対対勝ちますので」

そして、現れた私の相手は・・・

「では最後の受験生の試験を始める

お主の相手は懲役190年の死刑囚のクラークじゃ」

昔ぶっ飛ばした鎧男だった。

「くくくくく、嬢ちゃんが俺の相手かい
ラッキーだな俺は」

「本ツ当に偶然って恐ろしいですね」

「何のことだよ。ん、その声は・・・
ま、まさかてめえあの時の・・・」

「ん、知り合いか？」

「あ、はい。こいつは海賊で

昔、私の故郷に100人以上の部下を引き連れて
襲撃をしてくましてその際に私がこいつら
を叩きのめしたんですよ。」

詳しい事情を話すとネテロ会長とモラウは
なんか面白いものでも見つけたという顔になり笑っていた。

「ふむ、面白い試合になりそうじゃの
それでは始め」

「H A H A H A H A H A ツ

お前が相手とは俺はマジで運がいいぜ。
いくぜー」

そう言っつてクラークは殴りかかってきた。

私はパンチを冷静に避けて

脇腹に軽く手加減した正拳突きを叩き込んだ。

「ぐばあああああ」

クラークは吹っ飛び壁にたたきつけられた。

「ぐ、やるじゃねえか・・・」

がすぐに立ち上がった

「意外とタフですね。」

「ふん、俺はてめえにやられてから
監獄で鍛えに鍛えに鍛えに鍛えに鍛えまくったんだよ。
最強の俺に敗北の汚点を付けた
てめえにリベンジするためになあ」

「すごい執念ですね・・・」

「ふんっ」

クラークが体に力を入れると服が破れて
凄い筋肉が出てきた。

「見ろ、この鍛えに鍛えまくった筋肉を
この圧倒的な力でぶちのめしてやるぜ。
おら~~~~~」

そう言っつてクラークはチェリッシュに殴りかかったが

ドンッ

ドンッ

ドンッ

「ぐあああああっ」

「うるさい・うるさい・暑苦しいです(怒)」

麻酔弾を喰らわせて黙らせました。

そして、さすがにもうクラークは立ち上がることはなかった。

「そこまで435番チエリツシユハンター試験合格じゃ」

ネテロ会長とモラウが面白いのが見れたと笑いながら私の合格宣言をした。

こうして私はハンター試験を合格してプロハンターになった。

283期 ハンター試験 合格者4名

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141z/>

GUNHUNTERGIRL

2011年12月21日00時56分発行